

「第139回春季講演大会に寄せて」

講演大会協議会 議長 岡田 康孝

1. はじめに

春季講演大会はほぼ例年通り、3月29日より3日間、横浜国立大学工学部で開催される。講演会場は関係者のご努力により、近接した会場3ヶ所にまとめて頂いた。活発な討議を期待している。

2. 春季講演大会の動向

前回の秋季大会が11月末に実施されたばかりであり、講演件数が減少しないか心配であったが、結果的には昨年の春季大会とほぼ同数で、一安心した。注目すべき点は大学・国公立研究機関と企業の発表件数の割合が接近し、学会色が強くなったことであろう。

講演件数は春季大会と比較すると1998年が457件、1999年が478件、2000年が480件とやや増加の傾向が認められる。そのうち討論会が9件(78)、シンポジウム、成果報告会8件(59)、予告セッション8件(72)の他に、恒例により各種の受賞記念講演(28)が開催される。今回から、三島賞、里見賞、白石記念賞の受賞者にも講演をお願いすることになった。

また、講演大会期間中に、ヤング・サイエンティスト・フォーラムとして学生のための講演発表も予定されている。

1) 一般講演

講演数が多いセッションとしては、耐熱鋼31件、表面処理17件(めっき、有機被膜、耐候性鋼)、ステンレス12件、チタン・チタン合金10件があげられる。その他に介在物と凝固組織、超細粒鋼を得るための具体的な加工法などが興味深い講演としてあげられる。

また、予告セッションとしては「強磁場利用プロセッシング」、「精錬反応とスラグ物性」、「超音波プロセッシング」(以上高温プロセス部会)、「エコマテリアルとしての鉄鋼製品のLCA的検討」、「前近代鉄鋼史研究の到達点(その2)」(以上社会鉄鋼工学部会)、「鉄鋼生産・物流を支えるスケジューリング技術」(以上、計測・制御・システム工学部会)、「変態挙動と組織に及ぼす磁場の影響」、「フェライト系耐熱鋼の合金設計、合金開発と損傷評価」(以上、材料の組織と特性部会)の、8件が予定されている。以前の講演で注目されたテーマが多くあり、その後の展開が大いに期待される。

2) 討論会

今回も9件と多数の討論会が予定されている。テーマを見ると「高炉内におけるコークスの劣化挙動及び劣化抑制制御」「鋼管精整プロセスにおける技術開発の現状」「火力発電用高温材料の接合と表面改質」「形材圧延に代表される複雑な形状の3次元変形解析技術」、「鉄鋼材料の窒素—新しい可能性を目指して」、「薄鋼板の伸びフランジ加工性」、「橋梁用高性能鋼の現状と今後の課題」、「超微細組織鋼のメタラジー」、「高速圧延のためのトライボロジー技術」といづれも各分野において興味深くかつ重要な課題である。

3) 研究成果報告会

専門分野別部会の重要な活動である研究会、フォーラムについては、積極的にその成果を会員に報告することになっている。今回はその中で、以下の4件が報告される。

「計算機支援による組織制御」「合金化溶融めっきの皮膜構造と特性」「構造材料の環境脆化における水素の機能に関する研究—表面反応及び脆化機構」「耐熱鋼・耐熱合金の高強度—耐熱鋼・耐熱合金の高強度化における革新的機能強化機構とは」

4) シンポジウム

「超塑性材料の組織制御」、「高炉のモデルベース制御と圧延セットアップ学習の新展開」、「有害試薬を用いない新高感度分析技術」、「厚板製造技術の現状と今後の動向」

3. 過去2年間を振り返って

この2年間議長を務めさせて頂いたが、沢山の課題を抱えて出発し、現在に至っている。これらを思うままに列挙すると、大略以下の通りであった。いくつかは達成出来たが、これから検討すべき課題もあり、次期議長にお願いする次第である。

1) 講演発表件数減少への歯止め：1990年以降急激な低下が見られたが、昨年には下げ止まりが定着した。この間、大学・国公立研究機関と企業の発表割合は1:3からほぼ1:1に、また全講演件数の内、討論会、セミナー、予告セッション等企画ものの割合は増加を続け、今や50%に接近している。これは関係者各位の大変な努力があって成しえたもので、ここに改めて御礼申し上げる。

2) カタログ展示会の実施：講演大会の収益増加を狙いに、実施した。各企業に広告掲載を依頼し、何とか収入を上げることが出来た。

3) 学生ポスターセッションの目玉行事化：この2年間は毎回多数の応募を頂き、講演大会の重要な行事に発展した。会員からの直接の要望もあり、表彰を正式化するとともに、従来の優秀賞と努力賞に加えて、特別賞として最優秀賞を設置し、前回から表彰させて頂いている。

4) 国際化：昨年始めから準備を進め、前回の秋季大会で4つの国際セッションとして具体化することが出来た。短い準備期間にも拘わらず関係者のご尽力の結果、大変好評を得ることが出来た。しかしながら、反省すべき点もあり、今回はこれを活かすべく検討中である。

5) 講演大会の改革：協会では昨年4月よりタクスフォースを作って、改革を検討してきた。講演大会協議会では、これまで実施してきた講演大会の活性化に加え、春秋2回の講演大会の機能分化、ユーザーの講演大会への参加増、各部会の活動成果報告の場作り、教育等の新たな機能の追加を検討している。今後の具体化に期待している。

4. 終わりに当たって

この2年間はいろんな出来事があり、大変であったが、振り返ってみると充実していたとの実感が深い。講演大会は協会の「顔」的存在であり、これを支援する側として少しでも変革出来たとすれば、これ以上の喜びはない。

運営する中にどっぷり浸かって初めて分かったことであるが、講演大会の受け入れ側のご努力、プログラム編成を夜遅くまで掛かって完成させず稿集の納期を果たした協会本部スタッフの皆さん、本当に有り難うございました。

(2000年1月28日受付)